

はじめに

終の住まいと次の住まい

住宅双六という考えがあります。親元から独立して結婚したときは家賃の安い木造のアパートに住み、子どもができると少し広めのアパートや公営住宅に住み替え、やがて給料が上がるとマンションを買い、子ども部屋が十分にある広い住宅が必要となり、住宅ローンを組んで郊外の一戸建てを取得すると、「あがり」。いままで多くの人が「あがり」を目指してライフステージを考えていました。

いまや日本人の平均寿命は、男性が79.64歳、女性が86.39歳で、人生80年は当たり前になっています。そのなかで、ひとり暮らしのシニアは年々増え続け、日本全体の総世帯のなかで、単身高齢者の世帯の割合は1割にもなっています。いままで「あがり」と思っていたはずの一戸建て住宅に、独りで住み続けているシニアも多く、「あがり」ではなく次の住まいを考えざるを得ない状況が多く見られます。昔に建てた戸建て住宅は段差だらけで、思いがけず、つまづきます。ひとり暮らしでは、三度の食事も自分で作らなければなりません。それが大変で2食にしているシニアも大勢います。また北海道では、一戸建てに住んでいると、冬の雪かきは大変な重労働で、住み続けることが困難になることがあります。今年のように大雪の年には、特に大変です。だからといって、老人ホームに入るほど介護が必要なわけでもなく、日常の生活は自分でできます。実際に、8割以上のシニアは介護を必要とせず、まだまだお元気です。今の感覚では、65歳という年齢は、高齢者と呼ぶには若い感じがします。そのうち、高齢者と呼ばれる年齢も上がるでしょう。

このように、まだまだ元気だけれども、日常のひとり暮らしをすべて自分でやるには大変で、しかも万が一の時でも安心できるという、シニアのニーズを満たす住まいがなかなか少ないのが実態です。近年、そのニーズを満たすような高齢者住宅が増え始めています。昨年からはサービス付き高齢者向け住宅の制度が始まり、今後急激に増加することが見込まれています。「終の住まい」というほどではないけれど、「あがり」と考えていた今の住宅の「次の住まい」が、高齢化が急激に進むわが国全体で求められています。「次の住まい」に求められる要件は、基本的に自立して住まうこと、ひとり暮らしをサポートする食事などのサービス、もしもの時に助けになってくれる安心感、そして人とのつながりを常に意識して社会参加できるコミュニティです。高齢者住宅は単なる住宅でもなく、介護をするための施設でもありません。いままでの生き方を尊重し、いつまでも人間らしく生き続けるための住まいなのです。私たちが、余生ではなく、第二の人生を過ごすための住まい方が模索されています。そのための道標となるよう、この報告書では様々な調査および検討が重ねられてきました。是非とも、本報告書の内容を十分に活かしていただき、皆様のこれからの住まいを考える上で役立つことを願っています。

平成24年2月 吉日

住まいのアップ委員会委員長・北海道大学大学院教授 瀬戸口 剛